

小・中学校

平成11年度

教育研究員研究報告書

書 写

東京都教育委員会

平成11年度教育研究員名簿

	地 区	学 校 名	名 前
	中 央	有 馬 小 学 校	伊 東 久 子
	品 川	浅 間 台 小 学 校	百 田 範 恵
◎	荒 川	第 二 瑞 光 小 学 校	大 野 雅 子
○	江戸川	宇 喜 田 小 学 校	吉 井 喜 代 美
	八王子	横 山 第 一 小 学 校	山 口 典 子
	立 川	第 五 小 学 校	橋 い ず み
□	青 梅	新 町 小 学 校	川 上 泰 子
	世田谷	梅 丘 中 学 校	佐々木 希久子

◎ 世話人 □ 副世話人 ○記録係

〔担当〕 都立教育研究所指導主事 新 井 啓 子

目 次

I	研究主題について	1
1	主題設定の理由	1
2	研究のねらい	1
3	研究の全体構想図	2
II	研究の内容	3
1	自分の課題を見つけるように	3
2	課題解決の方法を見いだすように	4
3	課題解決に向けて取り組むように	5
4	達成感・成就感を得ることができるように	6
5	学んだことを日常生活に生かすように	7
III	実践研究	9
	<小学校第4学年の学習指導>	
1	単元名	9
2	単元の目標	9
3	単元設定の理由	9
4	児童の実態	10
5	本単元における指導の工夫	10
6	指導計画	11
7	本時の学習	11
8	本時の考察	12
	<中学校第1学年の学習指導>	
1	単元名	15
2	単元の目標	15
3	研究主題とのかかわり	15
4	生徒の実態	17
5	本単元における指導の工夫	17
6	指導計画	18
7	本時の学習指導計画	18
8	本時の考察	19
IV	研究のまとめと今後の課題	22

研究主題 一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習

I 研究主題について

1 主題設定の理由

2000年という新たな年を迎え、社会はこれからも激しく変化していくであろうことが予想される。21世紀を生きる児童・生徒に必要な力は「自ら学び自ら考える力」である。児童・生徒が学習していく中で楽しさを感じると「もっと知りたい」「もっとやりたい」「もっとがんばりたい」といった意欲が生まれ、「そのためにはどうすればよいか…」と考え始める。そして、実際にやってみてうまくいったり、もう少しでうまくいくと感じたりしたとき、学ぶことの楽しさや喜びを実感する。学習を楽しんでいると、真に児童・生徒の学習意欲となり自ら取り組もうとする主体的な学習活動へとつながっていく。それは生涯学習の基礎・基本としての「自ら学ぶ力」を養うということでもある。

国語科書写では、児童・生徒の主体的な学習を実践しながら、読み手を意識した伝達性の高い正しく整った文字を書くことができるようにし、場や用途に合わせて文字の大きさや字配りも考えて書くことができる能力・態度の育成をねらいとしている。

これは、国語科の目指す「適切に表現する能力」「思考力」「言語感覚」「国語に対する関心」「国語を尊重する態度」等の育成の基礎・基本であり、書写が国語科の「言語事項」に位置付けられている理由であると考えられる。したがって、書写の時間は、児童・生徒の主体的な活動による学習をいっそう重視し、一人一人が自分の課題をもち、その課題を解決しようとするを通して、学び方を身に付けていくようにすることが大切であると考えられる。

以上のことから、本年度は研究主題を「一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習」として研究を進めることとした。

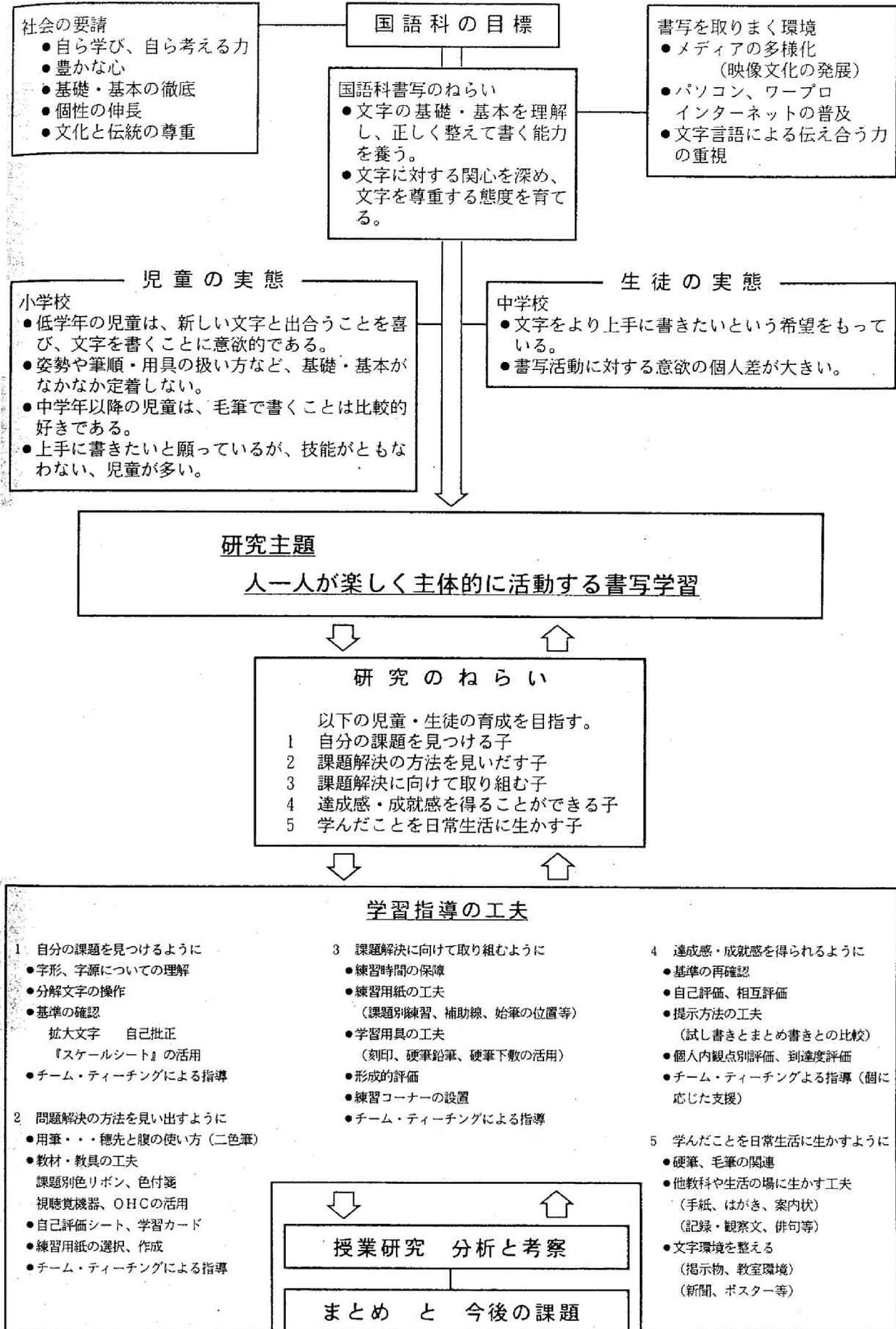
2 研究のねらい

児童・生徒が楽しく主体的に活動する姿を具体的にとらえると、学習の過程に沿って、次のような五つの段階が考えられる。まず、学習の導入段階では「興味・関心をもって自分の課題を見つけようとする」。その見いだした課題を解決するために、練習の順序や練習用紙選択の工夫などの「自分なりの解決方法を見つけようとする」。そして、自ら考え選んだ解決方法を使って課題解決を目指し「進んでしかも持続的に練習に取り組む」。その際、友人や教師に励まされたり、自分自身で成果を確認したりすることにより「課題達成の喜びを味わい」学習意欲がさらに高まる。そうして、書写の時間に学んだことを「日常生活の中で生かそうとする」ことにより書写に習熟していくであろう。

そこで、「一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習」の実現のために、以下のような児童・生徒の育成を目指す効果的な指導法を明らかにすることをねらって研究を進める。

- (1) 自分の課題を見つける子
- (2) 課題解決の方法を見いだす子
- (3) 課題解決に向けて取り組む子
- (4) 達成感・成就感を得ることができる子
- (5) 学んだことを日常生活に生かす子

3 研究の全体構想図



Ⅱ 研究の内容

1 自分の課題を見つけるように

学習の課題づくりは、学習活動のスタートである。書写学習で児童・生徒が「楽しく主体的に」活動するために、第一に課題づくりを児童・生徒自らが行うことができるようにすることが大切である。つまり、教師が課題を提示するのではなく、児童・生徒自らが自分の課題を見つけ設定していくことを基本にしたいと考えた。このように主体的に活動することを児童・生徒は「楽しい」と感じ、自分の課題を明確にもつことにより課題解決に向けてさらに意欲的積極的に取り組むことができる。そこで、具体的な指導法として以下のような工夫を考え、研究授業だけでなく日常の書写指導の場面に広げながら取り組むこととした。

(1) 課題を見つけるための児童・生徒の学習活動の工夫

ア 文字を正しく整えて書くためには、正しい筆順で書くことが重要である。そこで、導入部分では筆順を確認しながらゆっくり空書することを位置付ける。その際、教師は教材文字を板書したり掲示した拡大文字をゆっくりなぞり、児童・生徒はそれに合わせて書き順の画数を言いながら空書するようにする。そうすると、楽しみながら、よく観察して理解が深まり、自分の課題に気がやすくなる。

イ 試し書きと教材文字を比較（自己批評）して、試し書きの用紙に気付いたことを赤ペン書き込んだり○・△等の印を付けたりする。

ウ 教材文字の「基準」を明確につかむため上記「イ」の活動を通して気付いたことを発表し合い、その中で考えを整理していくことが有効である。

「基準」とは、目標に到達するための具体的な条件や技法などのことで、学習の中核となるものである。また、授業後の評価のポイントでもあり、そのまま評価の規準となることが多い。したがって、この「基準」を明確にとらえられなければ、効果的な書写学習は期待できない。学習の導入段階で、興味・関心をもって文字を整えて書くための「基準」を理解できるように十分配慮したいと考える理由である。



自己批評の例

(2) 課題を見つけるための教材・教具の工夫

ア 教材文字について興味・関心をもったり字形を理解したりするために、教材の「拡大文字」を黒板に掲示する。大きい文字を離れて見ると、一文字の組み立てとして上下、左右のバランス及び点画の間隔が分かりやすい。また二文字以上の文字の中心がそろっているかが判別しやすくなり、「基準」に気付くことができる。

イ 試し書きと教材文字を比較して自己批評を行うために、「スケールシート」を用いる。「スケールシート」は、OHPのクリアシートに、文字や行の中心となる直線を

書いて作ったものである。透明なので、試し書きや教材文字を重ねて中心線や上下・左右のバランスなどが明確になり、比較しやすくなる。

ウ 教材文字の「基準」を確認するために、各自で「分解文字」を操作したり、全員で「拡大分解文字」を操作しながら話し合ったりする。

エ 課題意識を明確にするために、「自己評価シート（学習カード）」に自分の課題を記入することが従来から行われている。大変効果があるが、狭い机上で複数の筆記具を用いることの難しさが課題であった。本研究では、児童・生徒の発達段階を考慮し、課題別の色リボンや色付箋等を用いて、練習時間の確保を図ることにした。

(3) 課題を見つけるための教師の支援

ア 児童・生徒の興味関心を高めるために、教材文字についての話をしたり字形や字源を示したりする。

イ 課題そのものを見つけられないとか、適切な自分の課題がとらえられないという児童・生徒には、再度「基準」を示したり自己批評の適否を助言したりして、気付くようにする。

ウ 字形の理解や「基準」の確認、筆の動きや使い方の理解の際、チーム・ティーチングであれば一人の教師が説明し、それに合わせて他の教師が教具を操作することにより、さらに効果的な展開になる。

2 課題解決の方法を見いだすように

文字を正しく整えて書く方法として、紙に何十回も書き長時間練習すれば、課題が達成されるであろうか。現在の児童・生徒の実態と合わせて考えると、どのように文字を書くかの目安としての基準を理解することが必要である。次に、その基準に照らして、児童・生徒が自分自身の課題を見つけ、その課題をいかに解決するか、その解決の見通しや方法を見いだせるようにすることにより、意欲的に課題解決がなされるものとする。

自分の文字と教材文字とを比較したり友達と話し合ったりしながら一人一人が楽しく主体的に、課題解決の方法を見いだすことができるように育てることは、生涯学習社会に生きていく児童・生徒にとって大切なことである。そこで、具体的な指導法として、以下のような工夫を考え、取り組むこととした。

(1) 解決方法を見いだすための児童・生徒の学習活動の工夫

ア 試し書きと教材文字を提示し比較することにより、全体で「基準」を確認し合いながら、自分の課題解決に向けての方法を見つけられるようにする。

イ 練習用紙の中から、自分の課題解決に合った練習用紙を選択し、児童・生徒自身が練習方法を考えながら、学習できるようにする。

ウ 「基準」に照らした自分の課題に合わせて、課題別色リボンや色付箋を選ばせることにより、各自の課題意識が明確に自覚できるようにする。また、それらを身近に置くことにより自分の課題を常に自覚でき、練習内容や時間配分の見通しをもつことができるようにする。

(2) 解決方法を見いだすための教材・教具の工夫

ア 自分の課題を書き入れることができる自己評価シートや学習カードを作成し、解決

方法を考えながら学習が進められるようにする。

イ 「分解文字」の操作を通して、点画の始筆の位置を確認し、課題解決の方法に気付くようにする。

ウ ビデオによる映像、水書シート、二色筆等の活用をすることにより、基本的な点画（止め・はね・払い・折れ・曲がり・そり・点など）の用法の解決方法を見いだせるようにする。

(3) 解決方法を見いだすための支援の工夫

ア 「基準」に照らした自分の課題を見いだすことができない児童・生徒に対しては、個別に助言し指導する。

イ 水書板や実物投影機などの用具や機器を使い、筆の動きや穂先と腹の使い方を二色筆で示範しながら説明すると、何がうまくいったのか、いかなかったのか、どう直せばよいかに気付き、課題解決の方法を見いだすうえで有効である。

ウ 筆使いについて「スーツ」「ポン」などの音声化を工夫し、基本的な点画の書き方の理解を深める。そのことにより筆使いの解決方法を見いだせるようにする。

エ 書写学習の参考資料を掲示するコーナーを設け、基本的な点画の筆使いを示した大きい図版などから、課題解決のヒントを常に得られるようにする。

3 課題解決に向けて取り組むように

児童・生徒の自主性、自発性を生かした学習展開は、児童・生徒の意欲を助長し、学習活動が活性化され楽しいものになる。意欲が高まり主体的に取り組むようになるためには、児童・生徒一人一人が何をどのようにすればよいかを理解していることが大切である。つまり、学習の課題をもち、学習方法が分かっていることが必要である。学習課題の達成に向かって自分なりの練習方法を明らかにすることが学習意欲につながり、主体的な学習を促す。一人一人が自分の学習課題を自覚して、自分なりの解決方法を考えて取り組むようにすることが、学習する楽しさを味わいながら進んで学び続ける姿勢につながるのである。そこで、具体的な指導法の工夫として、以下の工夫を考え実践することとした。

(1) 児童・生徒の学習活動の工夫

ア 児童、生徒が自らの課題を解決するためには、十分に練習や自己評価を行えることが大切である。課題解決に向けて練習する時間を確保し、達成感、成就感が得られるようにする。

イ 課題解決に向けて自ら選んだり考えたりしながらいくつかの方法で取り組めるように、練習用紙の工夫をしたり弾力的な学習時間の設定を図ったりする。

ウ 多様な解決方法を体験できるように、分解文字・水書板・二色筆などのいろいろな練習コーナーを設け児童・生徒が自由に試みることができるようにし、練習意欲をもち続けられるようにする。

エ 課題別グループに応じた座席にすることで、相互評価がしやすいようにし、達成感・成就感が得られるようにする。

(2) 教材・教具の工夫

ア 二色筆による示範：淡墨を使い、穂先のみ朱墨を付けた二色筆の示範を見ることで、

穂先の通り道を理解できるようにし、練習に生かせるようにする。

イ 課題別色リボン、色付箋の工夫：児童・生徒が自分自身の課題をはっきり自覚し、常に意識していることは、主体的な課題解決において極めて大切なことである。そこで、課題別に色リボンを腕に付けたり、色付箋を机上にはったりして、児童・生徒が常に自分の課題を意識できるようにする。

ウ 練習用紙の工夫

(ア) 教師が作成する練習用紙

a 課題解決への意欲をつけるため、易から難への練習段階を設定することが大切である。例えば、かご書き（なぞり書き）をする→穂先の通り道を示す→始筆の位置や角度を示す→概形の枠を示す→中心線を入れるなど。

b 練習用紙に評価欄を設けて、練習の過程でも自己評価ができるようにし、主体的に取り組めるようにする。

c 一人一人が、自分の課題に応じて練習用紙を選択できるようにする。（本時の課題解決を目指すものだけでなく「基本の点画」が練習できるようなものも用意するなど、個別の課題にも対応できるように配慮する。）

(イ) 児童・生徒が作成する練習用紙

a 教師が作成した「基準」が明確な練習用紙を手掛かりにしながら、自分の課題に合った練習用紙を児童・生徒が作成できるようにする。

b 補助線（「スケールシート」に合わせたもの）の入った用紙を用意し、それを活用して自分なりの練習用紙が作りやすくすることも実態に合わせて行い、主体的な学習ができるようにする。

(3) 学習意欲を持続するための支援の工夫

ア チーム・ティーチングによる指導：個別指導の場や機会を増やすことにより、適切な助言や評価の機会が増え、学習意欲を高められる。できるだけ、複数教師による指導を取り入れ、個別指導の時間を確保し、児童・生徒が意欲をもち続けられるよう励まししながら、解決の方法を見いだせるよう支援する。

イ 基本的な筆使いの指導：児童・生徒の課題解決を進めるうえでは、筆の穂先と腹をどのように使って書けばよいかというのは、大切なことの一つであるが、筆使いの習得には繰り返し練習が必要である。児童・生徒が、穂先の通り道を常に意識できるような支援として、「声かけ、基本点画の練習用紙、示範」等を工夫し、時間があれば児童・生徒が自由に活用できるようにしておく。

4 達成感・成就感を得ることができるように

自分の課題解決に合った練習が効果的にできたかどうかを確かめたり、友達のよさを認めたり、次時への意欲をもち続けられる児童・生徒にするために、特に評価について工夫することが重要である。

(1) 児童・生徒の学習活動の工夫

ア 自己評価

(ア) まとめ書きと試し書きを比べて学習成果を実感できるようにする。

(イ) 自己評価シートに学習の目標を書き、学習後自分の向上したところを確認し、達成感を得られるように助言する。

(ウ) 学習の目標がどの程度達成できたかを自ら評価することによって、次時への課題意識がより明確になり学習意欲につながるように励ます。

イ 相互評価

(ア) 相互評価をすることにより、互いの課題解決に向けての努力や課題を達成したことを認め合い、自分の学習に取り入れていけるようにする。

(イ) まとめ書きと試し書きを比べて友達の努力したところやよくなったところに気付き、認めあうようにする。



試し書きとまとめ書き

(2) 教材・教具の工夫

ア 課題別掲示や、まとめ書きと試し書きを並べた掲示などを工夫し、一人一人が課題としたところの進歩を自覚し、成就感を味わい、次時への意欲をもち続けられるようにする。

(3) 教師による支援の工夫

ア 児童・生徒が課題別リボンを付けたり、色付箋を机上にはったりすることにより、各自の課題意識を瞬時に見てとって、その課題にあった助言や励ましをする。

イ 一人一人の表情・つぶやき・学習活動・発言などをきちんと受け止め、肯定的に評価し、今後の学習に向かって意欲が高まるようにする。

ウ 一人一人の能力を引き出そうとするばかりでなく、その児童・生徒なりの成長をきめ細かく肯定的に評価する。

エ 児童・生徒が安心感をもてるように、「基準」に照らしてよくなった点を見付けて言葉をかけ、学習意欲や学習への集中力を高め持続するようにする。

5 学んだことを日常生活に生かすように

毛筆で学習したことを、他の学習や日常生活に生かしていくことは、児童・生徒の文字意識を高め、整った文字を書こうとする態度の育成につながり、書写の楽しさを味わえるようになっていく。それは、「読みやすい文字とは何か」を考え、「では、こうしている」と主体的に取り組もうとする意欲となっていく。

そうした文字意識をもち書く意欲を高めるために、次のようなことに留意した。

- 用具の選択：毛筆（細筆・太筆）・フェルトペン・硬筆等…目的に応じて使い分ける。
- 掲示、印刷：書いた文字や文を掲示したり印刷したりして発表する場を設ける…自己評価、相互評価の機会ができ、文字感覚が培われていく。
- いろいろな用紙の利用：目的に応じて多様な大きさや種類の用紙に書く体験を積むことにより、興味・関心が高まる。

国語科書写においては、文字を正しく整えて書こうとする能力・態度の育成をねらいとしているが、そこで身に付けた書写力を生活の場に生かそうとする児童・生徒に育てていくことも、大切である。

(1) 児童・生徒の学習活動の工夫

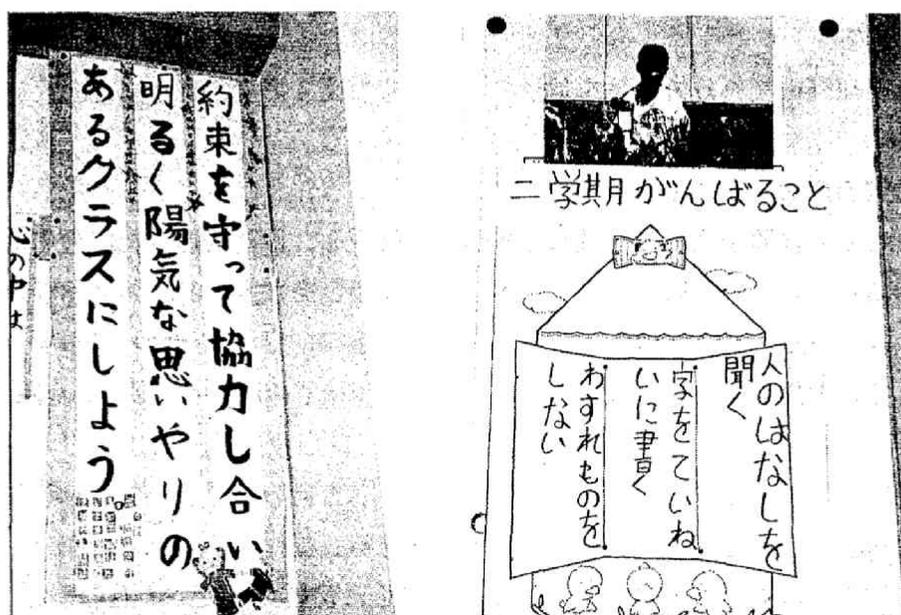
- ア 毛筆で学習した「止め・はね・はらい」などを硬筆に生かすことにより、児童・生徒の書写力があらゆる活動の中で生かされて生活の中に定着していく。
- イ 毛筆書写の教材に関連する文字を硬筆で練習することにより、学んだことを効果的に日常生活に生かすことができる。

(2) 教材・教具の活用

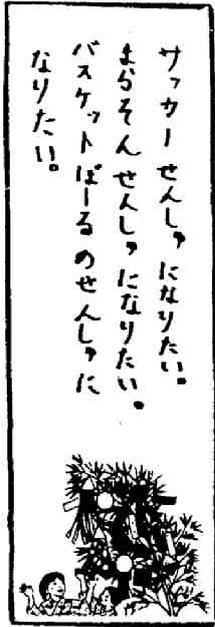
- ア 日常生活に生かせるような視点を盛り込んだ、学習カードを工夫する。
- イ 筆記用具は目的に合わせて選ぶ。

(3) 教師による支援の工夫

- ア 新聞づくりやポスターなど他者に知らせるために書く体験を通して、文字意識が高められていく場を作る。他に、詩の視写、手紙、俳句などもよい効果が得られる。
- イ 教室や廊下等の壁面を活用して文字環境を整え、互いの作品を見合えるようにする。読みやすい文字で書かれていることや整った書き方であることを話題にし、学ぶ姿勢を高められるようにする。



標語や自分の目標カードの例



短冊つくりの例



短作文の例

Ⅲ 実践研究

< 小学校第4学年の学習指導例 >

1 単元名 画の交わり方 「林」

2 単元の目標

(1) 書くことに関心をもち、課題意識をもって主体的に取り組むことができる。

< 関心・意欲・態度 >

(2) 毛筆で学んだことを硬筆に発展させ、日常生活の中で生かしながら書く活動を行うことができる。

< 表現の能力 >

(3) 横画と縦画の交わり方に気を付けて、字形を整えて書くことができる。

< 理解の能力 >

3 単元設定の理由

(1) これまでの経験を生かし、試し書きを自己批正し、段階を追った練習用紙を選択し練習することによって、自分の課題が達成できた喜びを数多く味わわせることが書写学習の楽しさにつながると確信する。達成感や成就是、自己評価のみならず友達に認められた喜び、先生に褒められた満足感などによって大きくなることが多いので、適切な支援を行っていききたい。

(2) 課題文字に対して興味・関心をもち、解決すべき自分の課題をはっきりさせ、解決方法を自ら選択し、意欲的に取り組もうとする姿勢を養っていききたい。

(3) 第3学年での毛筆学習によって、毛筆の扱いに慣れてきた。4月の画の接し方「光」、5月の方向「友」に続いて、画の交わり方を本単元で学習する。本単元では、へんとつくりでは横画と縦画との交わる位置や形が違うことや、つくりの横画はへんの横画の下から書くことなどを理解させ、字形を整えて書くことを指導する。このような学習を通

して基本的内容の理解を図り、技能を着実に身に付けることにより文字を正しく整えて書く硬筆の文字学習に発展させたい。

また、書写学習で身に付けたことが普段のノートや生活の中に生かされるような意識付けをしていきたい。さらに、漢字指導の折りには「止め・はね・はらい」等に目を向けさせ、字形を整えて書くような意識を高めたい。

4 児童の実態

明るく素直で、書写の学習に興味をもち、自分の上達の喜びや友達の素晴らしさを感じ取り、意欲的に取り組んでいる。文字を見る目も少しずつ育ってきている。「文字のいろんなことが分かるから」「うまくできたら『やったあ』と思えるから」「心の中でいろいろしゃべれるから」「はらいや止めなどがおもしろいから」等ほとんどの児童が毛筆を好きと感じている。また書写学習の時間には、書くときの姿勢・文字の形・文字の大きさ・筆順・筆の持ち方などに注意しながら取り組める児童が多い。しかし、技能面は今後の学習に委ねることが大きい。

5 本單元における指導の工夫

(1) 自分の課題を見つけるように

ア 拡大文字を黒板にはる。

イ 空書でゆっくり筆順の確認をする。

ウ 教材文字の中心に「スケールシート」を重ねて試し書きと比較することにより、「基準」が明確になって、今後の練習でどこに気を付けて書けばよいか分かり、自己批評もしやすくなる。

エ 気付いたことの発表の中から、自分の考えをまとめ、文字の「基準」をはっきりつかむ。

(2) 課題解決の方法を見いだすように

ア へんとつくりの「木」を実物投影機で重ねてへんとつくりの違いを再確認する。

イ 拡大分解文字を児童自らが操作し、「基準」に気を付けながら組み立てられるようにする。

ウ 筆使いで気を付けるところを二色筆で示範すると、穂先の通り道が分かり、気を付けようとする意識が生まれる。

エ 課題別色リボンを児童自らが選択し、その「基準」に合った練習方法を見つけるようにする。

オ 自分の課題に合った練習用紙を選択する。

(3) 課題解決に向けて取り組むように

ア 色別リボンを見て課題を意識しながら練習するので、できないことにだけ注目しないで、自分の課題に対する達成感を味わえる機会が多い。

イ 易から難への段階的な練習用紙から自分なりに選んで練習することにより、自主的に練習しようとする意欲が生まれる。

(4) 達成感・成就感を得ることができるよう

ア T.Tによって机間指導をしながら、個別に励ましや肯定的な評価が伝わるよう声

かけをする。

イ 児童の課題意識を瞬時に見取り、児童の意に沿って認め励まし、一人一人に適切な助言をする。

ウ 試し書きとまとめ書きとの比較がしやすいように、掲示コーナーを設置する。また、相互評価の時間をとり、成果を確かめることにより達成感・成就感を味わえるようにする。

エ 効果的な自己評価や相互評価ができるよう、話し方に気を付けるよう指導する。

(5) 日常生活に生かすように

ア 試し書きとまとめ書きとを対にして掲示することにより、児童がお互いに学習の成果を認め合い評価し合うことができるようにする。

イ フェルトペンや硬筆を使用し、毛筆で学習した成果が硬筆にも生かせるようにする。

ウ 教室や廊下等の掲示物の文字環境を整え、新聞やポスター等で自分の書いた文字を振り返る機会を作り、児童相互の文字意識を高め生かせる場を設定する。

エ 書写で学んだことを他の学習や日常の文字に生かせる機会をとらえて、文字を正しく整えて書くことを、継続的に指導する。

6 指導計画（2時間扱い）

第1時：横画と縦画の交わり方に気を付け、練習用紙を使って練習をする。（本時）

第2時：画の交わり方に気を付け、字形を整えてまとめ書きをし、その学習を硬筆に生かす。

7 本時の学習（1／2）

(1) 目標

- 試し書きと教材文字を比較し、自分の課題をもつことができる。
- 自分の課題に合った練習用紙を使って練習することができる。

(2) 展開

◎児童の学習活動の工夫 ☆教材・教具の工夫 ◇教師の支援

学習内容	学 習 活 動	指 導 法 の 工 夫
①「林」という文字を書くことを知る ②筆順を確認し、試し書きをする ③自己批評をし基準を設定する	<ul style="list-style-type: none">● 空書で筆順を確認し、筆の持ち方や姿勢などに気を付けながら試し書きをする● 教科書を見ながら自己批評し、気付いたことを赤ペンで書き込む（スケールシートを使い中心に目を向け操作する）● 自己批評をして分かったことを発表する	<p>◇T1 は主として廊下側児童、T2 は校庭側児童を支援する。</p> <p>◇ゆっくり左手で空書する ☆拡大文字（黒板） ☆教科書 ☆スケールシート</p> 

<p>④自分の課題をもち練習する</p> <p>⑤まとめ書きをする</p> <p>⑥自己評価をする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●「へん」と「つくり」を重ね合わせた図（実物投影機）を見て違いを確認する ●は横画の右よりに交わるように書き始める <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ①へんの縦画 ②つくりの縦画は横画の中心に交わるように書き始める ③つくりの横画はへんの横画の下から書き始める </div> <ul style="list-style-type: none"> ●拡大分解文字を操作し、基準の確認をする ●自分の課題をもち課題別色リボンを手につける ●示範を見て、基準の書き方を理解する ●自分の課題にそって練習をする <ul style="list-style-type: none"> ●1枚まとめ書きをする ●試し書きとまとめ書きを比べ自分の課題が達成できているか評価する ●次時の学習内容を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ◇発表者の気付きを学級全体で確認できるように拡大文字を使ってまとめていく <ul style="list-style-type: none"> ☆拡大分解文字 ☆実物投影機 ☆課題を表す色別リボン ◎リボンは一つとする ◇課題をもてない児童には助言 ◇T2 基準や筆使いが分かるようにゆっくり書く ☆二色筆 ◇練習中の一人一人の意欲を大切にしながら机間指導を行う ☆課題別練習用紙 <ul style="list-style-type: none"> ◇次時の学習に意欲がもてるように声かけをする
---	--	--

(3) 評価

自分の課題にそって練習することができたか。

8 本時の考察

(1) 自分の課題を見つける工夫について

ア 試し書きと教材文字とを比較し、自己批正をすることで児童一人一人が意欲的に課題を見つけ学習に取り組むことができた。

イ 「スケールシート」を使って自己批正したことも、中心や基準が確認しやすくなり自分の課題に気付く手立てとなった。

ウ 児童が、基準を声に出して確認したのがよかった。

基準の設定（実態調査と合わせて考察）

① へんとつくりの「木」の形が違う。

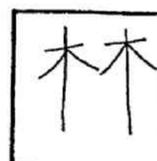
13人



14人



3人



② つくりの横画は、へんの横画の下から書く。

11人



17人



2人



- ③ 4画目と8画目の始筆の位置の違いに気を付ける。

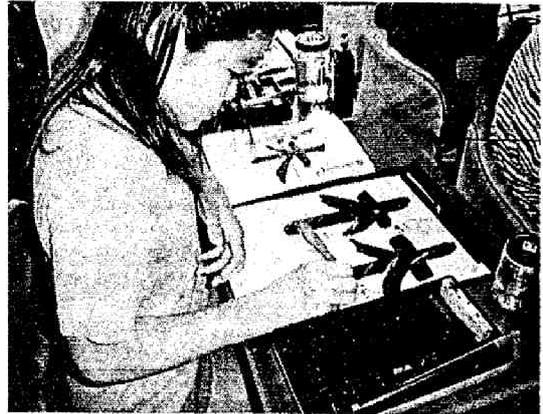
22人



リボンを付け練習する児童



試し書きを自己批評する児童



(2) 課題解決の方法を見いだす工夫について

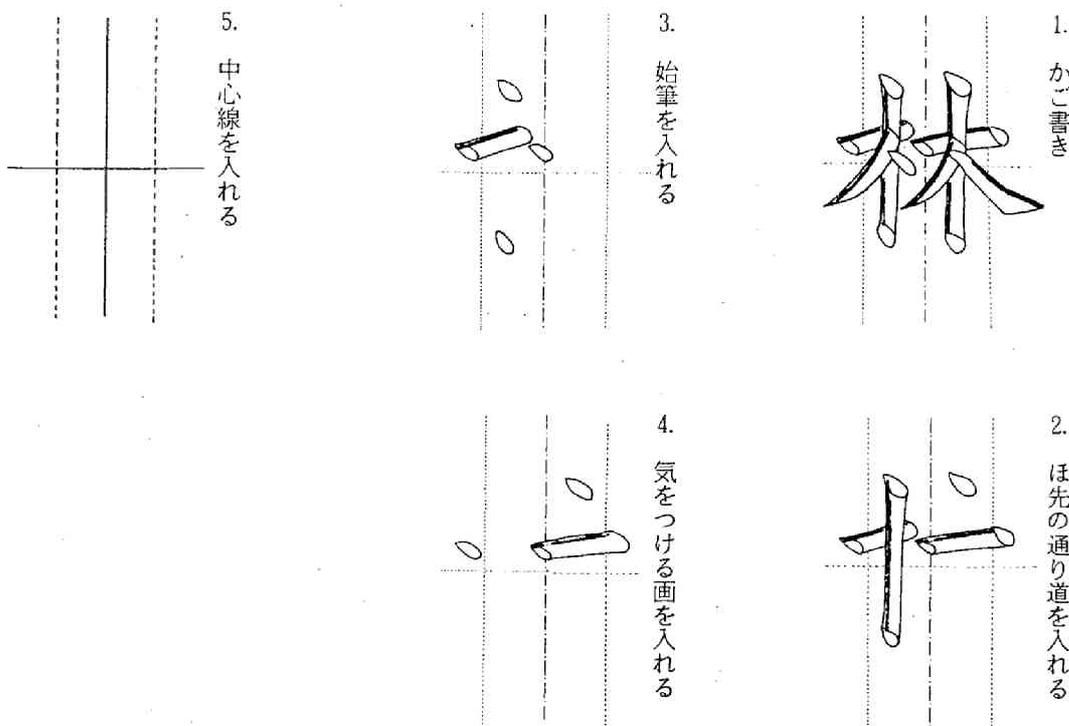
- ア 児童が意欲的に見つけた気付きの中から基準を三つに絞ったことにより、一つ一つが分かりやすかった。さらに、色別にしたので明確になった。
- イ 拡大分解文字を操作することによって三つの基準を再確認することができた。
- ウ へんとつくりの『木』の違いに気付くようにへんとつくりを実物投影機で重ねたことにより、「木」の右払いの長さに注目できてよかった。
- エ 実物投影機を使ってT2がゆっくり示範をし、T1が「基準」について説明をしたので、具体的で分かりやすかった。児童は身を乗り出すようにして見つめ、意欲が高まっていることが分かった。
- オ 「二色筆」を使い、筆の穂先の動きに着目しながら書くようにしたこと、筆使いの課題が明確になった。今後もこうしたきめ細やかな指導をしていきたい。
- カ 課題別練習用紙は、児童が基準を設定し到達目標に合わせて練習用紙を選択できるので課題にそって主体的に活動していた。

(3) 課題解決に向けて取り組む工夫について

- ア 課題別色リボンを手に付けることで、児童が課題を常に意識し教師側にも児童の考えが分かって支援がしやすかった。
- イ 課題別練習用紙は、1・2・3段階のレベルに合わせて技能が上達できるようにレベル1を1枚・レベル2を2枚・レベル3を3枚準備し、児童の書いた作品が教材文字に近付き課題を達成できるように作成した。児童の苦手な部分が克服できるように児童自らが選択して、必ずし5枚の用紙すべてを練習しなくてもよいとしたが、納得いくまで部分練習ができるので、主体的、意欲的に練習に取り組む姿が見られた。

ウ 学習カードを色別リボンに代えることにより書き込み時間が短縮され、練習時間が確保された。それでも、基準の確認に時間をかけたので、本時は8分間の練習時間だったが、基準に気を付けながらゆっくり練習をし、成果を感じるためには10分間は確保したい。

エ まとめ書きは1枚の半紙に意識を集中して書くことができた。



(4) 達成感・成就感をもつための工夫について

ア 効果的な自己評価や相互評価ができるよう、試し書きとまとめ書きとが比較できるように掲示コーナーを設置した。

児童の作品には「自作の印」を押し、自分のまとめ書きに愛着をもって自信につながるように指導している。

イ チーム・ティーチングによる支援を行ったことで、児童の要求に応じやすく、普段よりきめ細かな個別指導ができ課題解決に有効であった。ゆとりをもった声かけがより児童の意欲を喚起することが分かった。チーム・ティーチングによる役割分担を生かし、さらに、効果的なチーム・ティーチングによる授業の可能性を追究していきたい。

ウ 試し書きとまとめ書きを自分の課題と照らし合わせ、課題が達成でたことに気付くよう、大いに認め励ました。児童はできるようになった喜びを実感し、普段よりもいっそう満足した様子であった。



〈中学校第1学年の学習指導例〉

1 単元 三 行書の学習「大木」（初めての行書学習）

2 単元の目標

- (1) 楷書と行書の違いについて理解する。
- (2) 点画の変化と筆脈の連続について理解し、行書で書く。
- (3) 毛筆で習得した行書の書き方を硬筆で確かめ、日常化を図る。

3 研究主題とのかかわり

(1) 主体的な活動を支える思考活動の重視

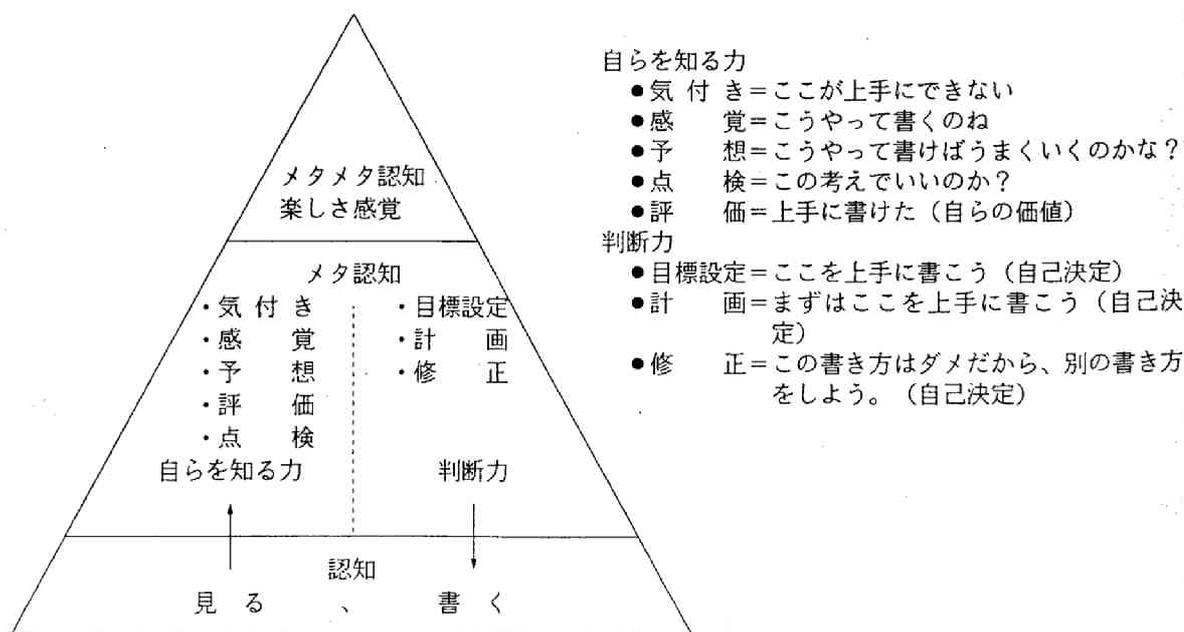
国語科書写学習を通して「一人一人が楽しく主体的に活動する」力を培うためには、自ら学ぶ意欲を育成する環境が必要である。

自ら学ぶ意欲は、知的好奇心と自らの価値を評価でき、自ら選ぶことができるという気付きを感じることによって培われると考える。人間は、自らの価値を評価し、すべてのことを自ら選べるようでありたい、つまり自己決定をしたいと思っている。そして、この自ら学ぶ意欲こそが、人を課題に向かわせる。その課題に挑戦し習得することによって、自らの価値を積極的、肯定的に評価でき、さらに目標を達成したときの達成感・成就感こそが「楽しい」という心情だと言える。

自らの価値を評価し、自己決定をする思考活動は、自らを知り判断する力につながる。自分が行っている活動が自分にとってどんな効果があるのか。それを客観的に知ることが、自らの価値を評価でき、自己決定的であると強く感じるができるのである。

したがって国語科書写の学習が単に整った文字を書く技能を学ぶためのものではなく、どのように書けばよいのかの思考活動は、自ら学ぶ意欲を育成し、すべての学習活動の基礎になる主体的な学習活動を導くことができるように進めていきたい。

図1. 思考の構造図



(2) 楽しく主体的な学習をするための評価の工夫

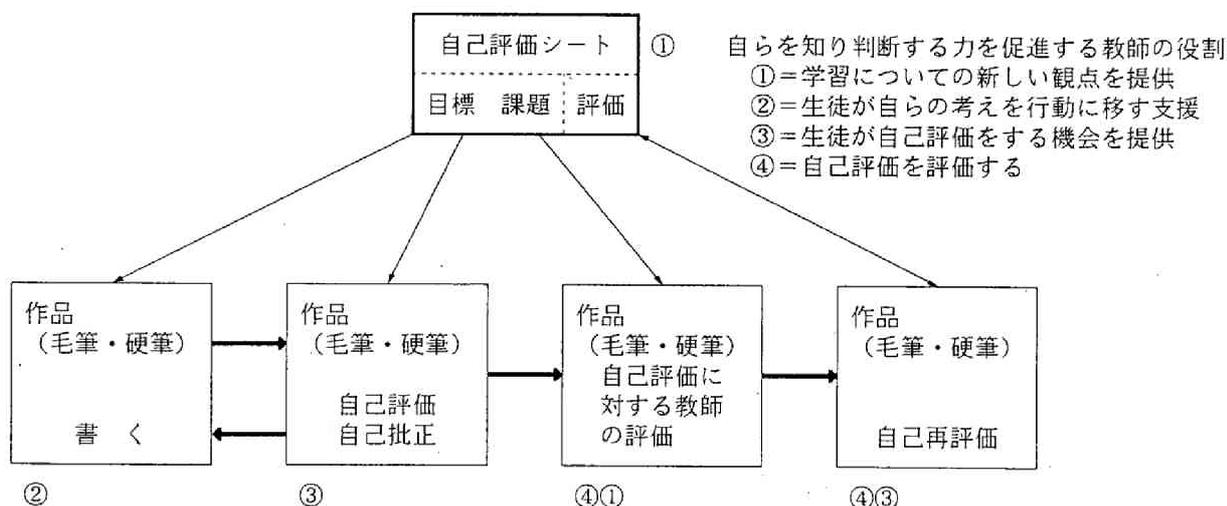
書写は小学校から継続して学習する。中学校では小学校での学習の成果を踏まえ、楷書とそれに調和した仮名、行書の基礎的な書き方及びそれに調和した仮名を学習する。そして、その成果を日常の硬筆及びその他の書字活動に活かすことが書写の目標である。

自らを知り判断する力を育成するために、教師は、①学習対象についての新しい観点を提供し、②生徒が自らの考えを行動に移すことを支援し、③生徒が自己評価をする機会を提供し、④生徒の自己評価の評価をする。今回の研究では、これらを自己批評と自己評価シートの活用を通して工夫し行いたい。

自己批評とは書写の用語で、自分で書いた文字を自分自身で教材文字と比較しながら訂正したり批評したりすることをいう。これは、自分の書写における課題をつかむのに有効的な手段とされる。

生徒は目標基準〔別表〕（次ページ参照）を手掛かりに、個々の課題意識と関心・意欲によって自らの課題を選び、自己評価シート（①）に記入する。この課題の自己決定は、自己の書写力を自覚している生徒は的確に行うと思われる。次に課題に従い試し書きを行い（②）自己批評をする（③）。自分に必要な練習用紙を選択し、練習と自己批評や自己評価を繰り返す（②③）。教師はその際、積極的な形成的評価を行う必要がある。課題解決に向けて取り組む生徒をほめながら、達成感・成就感を得させ、生徒が自らを知り判断する力を支援し、楽しく主体的に学習する心を喚起するのである。

図2. 生徒の活動の流れと評価の構造図



教師による総合的評価は、提出されたまとめ書きと自己評価シートを用いて行う。生徒が、自分で選んだ課題の解決に向けて的確に自己批評をしているか、まとめ書きと試し書きを比べて自己の上達の様子を的確に自己評価しているかに注目する（④①）。そして、生徒の達成感・成就感を認めながら、次の課題に向けて自ら考え自ら学ぶ意欲を喚起するような評価を行って返す。生徒は教師の評価を基に改めて自己を肯定的に再評価し、日常の書くことについても、興味・関心をもつようになるであろう。そのためには自己到達度評価がより適切であると考えられる。

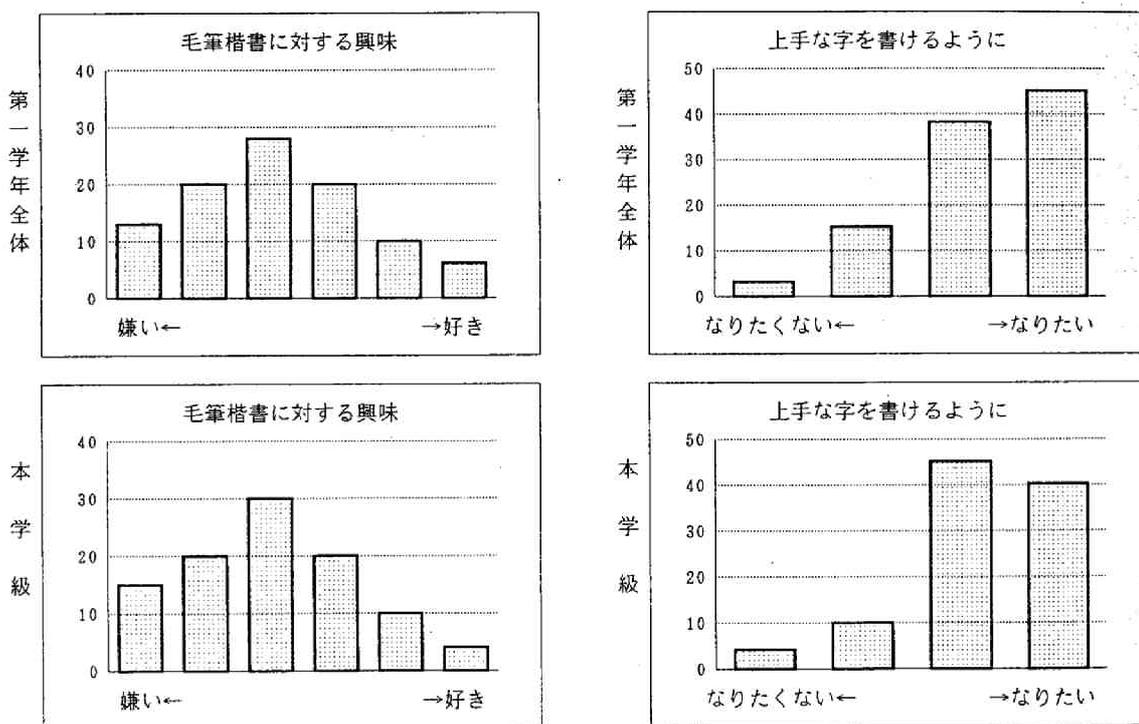
4 生徒の実態

生徒の書写に関する意識調査を行ったところ図3のような結果になった。

「第1学年の毛筆書写に対する興味」「本学級の毛筆書写に対する興味」を比較すると、毛筆書写を嫌いという生徒がやや多めの傾向がある。その理由は、面倒臭い、墨で手や服が汚れるのがいやといった周辺の事柄が多く挙げられている。が、うまく書けないというのも原因になっている。

一方、好きだと答える生徒は、楽しい、雰囲気が良いとしている。書写の時間は静かに取り組むことが一般的なので、その静寂が気に入っているようである。また図3の第1学年全体の「上手な字を書けるように」と本学級の「上手な字を書けるように」の分布から分かるように、ほとんどの生徒が「上手な字を書けるようになりたい」と思っている。個別に見ると、本学級でも書写が好きであればあるほど「上手な字を書けるようになりたい」という欲求を持っていることが分かった。

図3. 書写に関する意識調査



5 本单元における指導の工夫

(1) 自分の課題を見つけるように

ア 別表の目標基準を確認し、自分の学習課題を考えるようにする。

イ 拡大文字と行書の特徴を書いた表を黒板にはり、本時の教材文字の基準を明確にする。

(2) 課題解決の方法を見いだすように

ア 二色筆による示範を行い、行書の筆使いの特徴が分かるようにする。

イ 自己評価シートを用いて、自分の課題を選び、練習方法を考え記入する。

ウ 自分の課題にあった練習用紙を選択する。

(3) 課題解決に向けて取り組むように

ア 色別の付箋紙を机上に示し、常に自分の課題を確認できるようにしておく。

イ 自分の目標にあった練習用紙を自由に選択しながら練習する。

(4) 達成感・成就感を得ることができるように

ア 机間指導をしながら個別に対話をし、適切な助言、肯定的な評価を行う。

イ 自分の課題が達成できているかという観点で繰り返し自己評価を行うようにする。

ウ 試し書きとまとめ書きを比較し、自分の達成度や新たな課題に気付くようにする。

(5) 日常生活に生かすように

ア 硬筆や漢字指導のなかで「大木」と似ている文字を取り上げ、継続的に行書の書き方を学習できるようにする。

イ 教室内に行書を使用した文字環境を増やし、行書の定着を図る。

6 指導計画（3時間扱い）

第1時 楷書と行書の違いについて理解する

第2時 「大木」を行書で書き、点画の変化と筆脈の連続について理解する。自分の課題にそって練習し、自己評価をする。

第3時 「大木」と共通点のある漢字を行書で書き、日常の漢字学習に活かす。

7 本時の学習指導計画（2 / 3 50分）

(1) 目標

- 「大木」を行書で書き、点画の変化と筆脈の連続について理解する。
- 自分の課題にそって練習し、自己評価をする。

(2) 展開

◎生徒の学習活動の工夫 ☆教材・教具の工夫 ◇教師の支援

学習内容	学習活動	指導法の工夫
<p>①楷書と行書の違いを確認する。</p> <p>②「大木」の行書体の特徴（基準）の確認。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を見ながら、楷書と行書の違いを確認し、発表する。 ●黒板の表を見ながら、「大木」に当てはまる基準（特徴）を発表する。 ●前時にたてた、各自の目標の予想を確認する。 	<p>☆黒板に六つの項目を書いた表を提示する。</p> <p>☆拡大文字を提示する。</p> <p>◇基準ア～ウの項目ごとに色別のチョークを用いて、拡大文字の台紙に書き込む。</p> <p>☆自己評価シート</p>
<p>③基準を知る</p> <p>ア 曲線的でやわらかい。 ＜ピンク色付箋＞</p> <p>イ 点画の形や長さ、方向などが変わることが多い。 ＜黄色付箋＞</p> <p>ウ 点画と点画の間の筆脈に線が出る人が多い。 ＜青色付箋＞</p>		<p>◇T2は示範をする。初めての行書なので、ゆっくり書く。</p> <p>☆二色筆を用いて穂先の通る位置を明らかにする。</p> <p>◇T1はア～ウの基準と用筆に特に留意しながら解説する。</p>

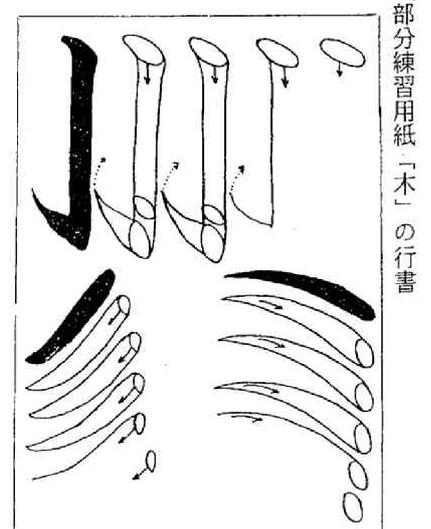
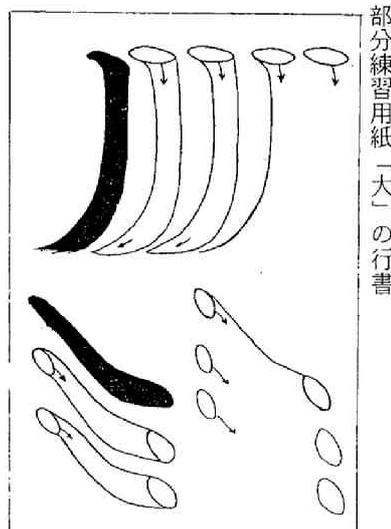
③試書と自己批評	●用筆の留意点に注意しながらT2の行う示範を見て、基準を確認する。	◎生徒のつぶやきを大事にし、課題が明確になるような視点で助言する。
④課題の決定	●1枚目の半紙に試書をする ●教科書の文字と比べ、自己批評する ●自己批評に基づき、本時の目標を決定する。	☆色別付箋紙 (ア ピンク色、イ 黄色、ウ 青色)
⑤練習と批評	●自己評価シートに赤ペンで記入する(前時に立てた目標と異なるとき) ●自分の課題を表す色別の付箋紙を墨汁容器に貼って見えるようにする。	☆練習用紙 ◇用筆の曖昧な生徒には手を添えて指導する。
行書の特徴に注意しながら、課題解決に向けて練習しよう		
⑥まとめ書きと自己批評 ⑦自己評価	●自分の課題解決の目的に合った練習用紙を使い練習する。 ●質問がある場合には積極的に教師を呼ぶ。 ●2枚目の半紙にまとめ書きを行う。 ●自己批評をする。 ●試し書きと見比べて自己評価をする。 ●自己評価シートに記入する。	◇生徒が課題や指導して欲しい点を説明するように支援し、対話の中で指導及び評価となる声かけを加えてゆく。 ◎自分の課題を達成した部分に目を向けるように声かけを行う。

(3) 本時の評価

「大木」を行書で書き、点画の変化と筆脈の連続について理解できたか。
自分の課題にそって練習し、自己評価できたか。

8 本時の考察

本学級では、本時以前に行ったアンケート調査で、34.5%の生徒が書写に興味・関心をもっていた。しかし、本時の終わりの自己評価シートによると、89.7%の生徒が本時の授業に楽しさを見いだしていた。書写に対し興味・関心が増したと言えよう。また、自分の課題を見つけるために配布した「目標基準」から生徒は平均で3～4項目の課題を選んでいく。自己の課題意識と経験から、自分に適した課題を選んで積極



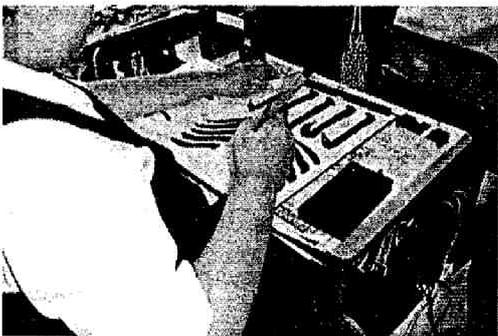
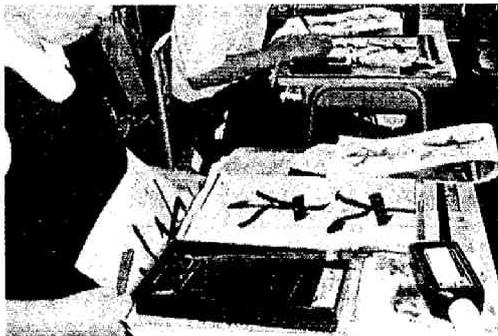
的に取り組んでいたと言える。またそのうち、平均3項目の課題が達成されているので、課題の選び方も適切であったと思われる。そして、この達成感・成就感を得られたことが書写への興味・関心を増した理由と言える。

各生徒が自分で練習用紙を選択していたが、課題解決に向けて特に役立つ練習用紙として1、2、3枚目を挙げている。これらは文字の基礎・基本の練習をするためのもので、初めての行書学習を意識しての選択と思われる。

本時の学習では、初めての行書学習ということ意識させるために、特に行書で書くときの3項目の課題を優先的に選択するように指導した。その優先課題に関しては89.7%の生徒が達成したと自己評価している。また優先課題以外の課題からも82.8%の生徒が課題選択しており、生徒が積極的に書写の能力を高めようとしていることが分かった。

さらに、これだけ多数の生徒が書写に対し興味・関心を増したということは本時の学習を日常に生かすための素地が培われたと思われる。

学 習 風 景



自己評価シート

自己評価シート 組B番6号

1. 今日の目標	8	17	19	20	22		
2. 今日の評価 (◎△×)	◎	◎	△	◎	◎		
3. 目標達成するために役立った練習用紙No. 1 多し枚数と多い紙に書いた練習用紙No. 1							
4. 今日の文字を書いたときの感想 はじめての行書の練習に気が、気が、気が、							
5. 今日の授業の感想 なかなか楽しかったのが、た。							
6. 今日の評価 (◎△×) ◎							

Oh!?! 自己評価シート 組B番12号

1. 今日の目標	18	8	20	22			
2. 今日の評価 (◎△×)	◎	◎	◎	◎			
3. 目標達成するために役立った練習用紙No. 5 多し枚数と多い紙に書いた練習用紙No. 7							
4. 今日の文字を書いたときの感想 字が学々とOK							
5. 今日の授業の感想 心が静かになりとよかった。							
6. 今日の評価 (◎△×) ◎							

以上、本時では、研究のねらいのうち4項目が達成できたと言える。本時の学習を日常生活に生かすためには、さらに行書の学習を深め、文字環境を整えることにも留意していくことが必要である。

本時の反省として次のことが挙げられる。まとめ書きそのものに自己修正しなくてもよいのではないか。特に大事なことは、試し書きとの比較を通して、良くなった点を中心に自己評価シートを使って評価することである。そうした方が達成感・成就感をより得られると思われる。1単位時間には全生徒の様子を見て取ることは難しいので、自己評価カードの活用も含めてさらに工夫したい。

[別表] 目標基準

国語科書写の学習事項 [言語事項]

- ア 字形を整え、文字の大きさ、配列・配置に気を付けて書くこと。
 イ 漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き、漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。

1. 姿勢や筆の正しい持ち方を理解して文字を書くこと。

番号	指導	細	目
1	姿勢	文章を書く姿勢を習慣化すること。	
2	姿勢	筆の持ち方を習慣化すること。	
3	姿勢	腕の構え方を習慣化すること。	

2. 用筆（筆使い）について理解を深め、文字を書くこと。

番号	指導	細	目
4	用筆	点画の始筆などの用筆に注意して丁寧を書くこと。	
5	用筆	点画の送筆（折れ、曲がりなど）などの用筆に注意して丁寧を書くこと。	
6	用筆	点画の終筆（止め、はね、はらい）などの用筆に注意して丁寧を書くこと。	
7	用筆	筆の運び方の遅速や圧度に注意してかくこと。	

3. 字形の整え方について理解を深め、整った文字を書くこと。

番号	指導	細	目
8	字形	点画の長短などを適切にして字形を整えること。	
9	字形	点画の方向などを適切にして字形を整えること。	
10	字形	点画の接し方、交わり方などを適切にして字形を整えること。	
11	字形	点画と点画の間などを適切にして字形を整えること。	
12	字形	文字の概形、中心のとり方などを適切にして字形を整えること。	
13	字形	文字の左右・上下の組合せなどを適切にして字形を整えること。	
14	字形	筆脈の一貫性に注意して字形を整えること。	
15	筆順	筆順についての原則的なことを理解し、筆順に従って書くこと。	

4. 紙面に書かれた文字全体が、紙面全体から見て、つり合い整って書くこと。

番号	指導	細	目
16	調和	紙面の大きさと書かれた文字の大きさの調和を注意して丁寧を書くこと。	
17	調和	文字の大小の調和を注意して丁寧を書くこと。	
18	調和	文間・行間・余白の調和を注意して丁寧を書くこと。	

5. 行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。

番号	指導	細	目
19	字体	点や画の形が丸みを帯びる場合があることに注意すること。	
20	字形	点や画の方向、止めやはらいの形が変わる場合があることに注意すること。	
21	字形	点や画が連続したり、省略されたりする場合があることに注意すること。	
22	字形	筆脈に注意し、文字の連続に注意して書くこと。	

IV 研究のまとめと今後の課題

本年度は「一人一人が楽しく主体的に活動する書写学習」という主題で研究を進めてきた。

児童・生徒が楽しく主体的に学習するためには、次の五つの視点から学習活動のよりよい展開を図ることが有効であろうという仮説を基に、研究を進めた。

- 1 自分の課題を見つける子
- 2 課題解決の方法を見いだす子
- 3 課題解決に向かって取り組む子
- 4 成就感、達成感を得ることができる子
- 5 学んだことを日常生活に生かす子

研究員全体で取り組んだ研究授業は小学校及び中学校の毛筆学習であったが、この1年間、各研究員が自分の書写指導の中で、上記の五つの視点を押さえて指導法の工夫を行いながら、検証を進めてきた。その結果、次のような成果が得られたと考える。

1 自分の課題を見つけられるような工夫について

硬筆書写においても毛筆書写においても、試し書きと教材文字を比較し、「スケールシート」や「拡大文字」を使って文字の組み立てを観察したり、「分解文字」を操作したりする活動をはじめに位置づけ、それを通して自己批評をしたことによって自分自身の課題が明確になり、意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになった。

2 課題解決の方法を見いだせるような工夫について

課題が明確になると、その課程で自分なりの解決方法を思い浮かべることができるようになった。そうして、一人一人が自分の考えにしたがって、課題に応じた数種類の練習用紙の中から選択しながら練習を進めることができた。学習カードや評価シートの感想欄を見ると、練習用紙の種類や枚数の制限がないことから、自分のペースで練習できたことが課題解決の意欲をいっそう高めていると分かった。

3 課題解決に向けて取り組めるような工夫について

一人一人の課題に応じて色別のリボンや付箋を用意したことにより、個に応じた支援をより適切に行うことができた。個別の学習課題を瞬時に見取って、自己評価が厳しすぎる児童・生徒への「課題達成」を認める語りかけや、課題に応じた賞賛を行うことができるので、児童・生徒の学習意欲を高め持続させることができた。そして、真剣に練習に取り組んだ児童・生徒は、大きな満足感・達成感を得ることができた。

また、練習への抵抗が少ない学習用具を使用したり、練習コーナーを設けたりしたために、楽しみながら主体的に課題解決に向けて取り組むことができた。そして、これらの活動の中で児童・生徒相互の学び合いの姿も見られるようになった。

4 成就感、達成感を得ることができるような工夫について

児童・生徒が相互に比較・検討しながら試し書きや清書を見合えるよう掲示コーナーを工夫したことにより、自己評価や相互評価の適切さが増し、認め合いながら自分の課題に向かって主体的に学習しようとする意欲が感じられるようになった。特に、チーム・ティーチングの際は、学習中により多くの励ましの助言が行えるので、いっそう効果的であると実感できた。

5 学んだことを日常生活に生かすような工夫について

このことについては、児童・生徒の発達段階に応じて、他教科・領域等との関連を図りながら、書く活動を様々に設定するよう工夫した。確かに、児童・生徒の書いた文字によりよい変容が見られることは多くなったが、まだ、進んで文字を書くことを工夫したり、引き受けたりするようになったとは言えない。

以上、多くの成果を得た1年間であったが、児童・生徒の一人一人の内面を必ずしも十分にとらえ切れたわけではないと反省することもあった。課題を意識しすぎて小さい文字を書いてしまったり、筆使いがかえってうまくいかなかったりする児童・生徒も見られたからである。ただ、発達段階にかかわらず、「学ぶ楽しさ」は「できた喜び」と表裏一体であり、的確な学習方法の指導が不可欠であることが改めて分かった。

今後の課題として、次の三つを掲げ、この一年間の成果をさらに高め広げるよう努力していきたい。

- 1 整った文字を書きたいという書写に対する児童・生徒の願いをかなえ、達成感、成就感を味わうことができるよう、授業時間の弾力的な運用や練習用紙・教材教具の開発などに取り組むこと。それと同時に、教材教具づくりや指導が負担にならない「だれでもできる書写指導」を今後目指していくこと。
- 2 新学習指導要領では、小学校書写は5単位時間程度、中学校書写第1学年では7単位時間程度、第2・3学年では3～4単位時間程度の減少となる。効果的な学習を押し進めるためにも児童・生徒の思いやつまずきを的確にとらえる教師の目を養っていくとともに、チーム・ティーチングを行えるように、その在り方や支援の工夫についてさらに研究を深めること。
- 3 書写力が、児童・生徒のあらゆる学習の中で生かされることや、目的や用途にふさわしい文字を書こうとする文字意識・文字感覚を、日常生活の中で育てるような工夫を重ねていくこと。